多摩市における園芸ボランティアを成功に導くための基礎研究
－東大阪市における緑化ボランティア育成講座に参加して－

山　　浩美（本学非常勤講師）
澤登　早苗（人間環境学科）

はじめに

近年、公園や公共の花壇・緑地などの管理が地域ボランティアの手で行われることが増えている。恵泉女学園大学がある多摩市でも公園施設等のアダプト制度[1]が取り入れられており、本学も教育プログラムの一環として、多摩センター駅前にあるプランターや花壇の管理を行っている。

筆者らは、江戸川区における公園ボランティア活動や港区における子育て支援施設等での菜園教育活動などに関わる中で、園芸を通じた社会貢献のニーズが年々高まってきていることを実感している。また、本学園芸文化研究所主催の公開講座で「タネから育てる花壇管理」や「有機園芸サポーター養成講座」を担当したり、地元商店街におけるツリーサークルガーデンプロジェクト[2]に取り組む中で、本学が積極的に地域に出ていき、園芸の魅力や栽培技法、公共空間の効果的な活用方法などを提案していくことは、本学に与えられた重要な社会的責任であると痛感している。既に、本学教職員が学外で取り組む園芸活動は複数あるものの、それらの多くは個人活動の範疇に留まっているため、これらを拡充させていくためには組織として発展・展開していく必要がある。

一方、公園に代表されるような公共の花壇、地域の花壇では、扱う植物のバラエティーが乏しい上、満足のゆく手入れがなされていない場合が多く見受けられる。維持管理に手間と費用がかかる花壇では、それらを美しく保つた

めに地域のボランティアが果たす役割は大きい。その場所に住む人たちによって手入れされた花壇はただ美しいばかりでなく、地域を見守り安全な街をつくることにもつながる。さらに地域コミュニティーの形成にも役立つなど多くの利点を見出すことができる。このように美しくかつ地域社会の形成・活性化につながるような花壇を維持・管理していくためには、園芸ボランティアの養成と継続が不可欠となる。しかし、園芸ボランティアを養成しようとする取り組みはまだ各地で始まったばかりである。

そこで、地元多摩市において園芸ボランティアを成功に導くためには何が必要であるか、本学はどのように関わっていくべきであるかを明らかにするための研究を開始することにした。本報告は、その最初の段階として、園芸ボランティア養成において実績のある関西地方において先行事例を調査した結果をもとにまとめたものである。

東大阪市における緑化ボランティア養成講座

2007年、大阪府東大阪市で緑化ボランティア講座「花とみどりのまちづくりセミナー」が開催された。目的は、花づくりの基礎的知識や技術を学び、花づくりや緑化ボランティアを担う人材を育成することにあり、「花づくりボランティアの会　園芸なかま」が主催し、東大阪市建設局（都市整備室）の後援、東大阪市教育委員会、財団法人東大阪市園芸協会、大阪府立たまがわ高等支援学校、地元商店街や自治連合会などの協賛を得て開催された。受講料は1人あたり2,500円（全5回分）、講師は室谷　優二氏[3]、募集定員60名ところに、地域の園芸活動を行っているボランティアグループを中心に46名が受講した。

セミナー概要は表1に示した通りであるが、7月28日から10月27日まで、現地視察1回を含む5回に渡り講座が開かれ、毎回、2つのテーマについて各々1時間程度の講義が行われた。

表1 「花とみどりのまちづくりセミナー」の開催概要（2007年）

	月　日	内　　容
第1回	7月28日（土） 13:30～15:50	「緑化ボランティア活動の進め方」 ①緑化ボランティアの役割と活動について ②緑化ボランティアに必要な技術と知識
第2回	8月25日（土） 13:30～15:50	「花壇づくりの基礎知識」 ③花壇の役割と効果 ④花壇づくりのテクニック
第3回	9月8日（土） 13:30～15:50	「植物の育て方」 ⑤タネから花が咲くまで ⑥育て方のポイント
第4回	10月6日（土） 13:30～15:50	「現地視察」 大阪府立浜寺公園
第5回	10月27日（土） 13:30～15:50	「花壇管理の考え方」 ⑦花壇の日常管理 ⑧花壇を楽しむためのポイント

注：開催場所は現地視察を除き、大阪府立たまがわ高等支援学校、講師は全て室谷優二氏

資料：セミナー開催案内チラシ

「花づくりボランティアの会　園芸なかま」の発足と緑化ボランティア育成講座

本講座を主催した「花づくりボランティアの会　園芸なかま」は、近鉄奈良線の河内花園駅前の再開発事業により、花園商店街が存亡の危機に見舞われたことがきっかけで誕生したボランティアの会であり、現在事務局は、花園商店街振興組合内におかれている。花園駅周辺では、2005年から再開発工事が始まったのに伴い商店街の通行人や客足が激減し、商店街が存亡の危機に陥ったのを契機に、商店街有志と近隣住民が共同で商店街の活性化やまちづくりに「花園」の地名を活かしていこうという機運が高まり、市の緑化助成を受け、花とみどりいっぱい花園運動が開始された。これを記念し2006年10月、室谷優二氏を講師として招き、「花とみどりのまちづくりセミナー」と題した記念講演会が開催された。この講演会には、地元の市議や会場を提供した府立たまがわ高等支援学校の校長をはじめ約100名が参加し、地元の

英田南校区及び玉川校区の両連合自治会も後押したことから地域ぐるみの運動の開始にふさわしい会となった。さらに、この会での室谷講師の講演に刺激されて発会されたのが、「花づくりボランティアの会　園芸なかま」であり、毎週水曜日の午後2時から3時半を定例活動日と定め、定例的に活動が行われるようになった。2007年度、「花づくりボランティアの会　園芸なかま」は、東大阪市まちづくり活動助成金[4]の交付を受けて活動しており、そのため今回のボランティア養成講座も、東大阪市花園再開発事業「周辺まちづくり事業」の一環として位置づけられている。

本講座が開催されるに至った背景には、現在工事中である近鉄奈良線の河内花園駅前広場の緑化事業について「花づくりボランティアの会　園芸なかま」が東大阪市や再開発組合と協議を行うなかで、計画段階からボランティアなどが参画してデザインや運営、維持管理など事業の地域（市民）委託化を目指したいと考えるようになったという事情もあると聞いている。また、記念講演会に続いて今回も会場を提供した大阪府立たまがわ高等支援学校[5]は、福祉・園芸科を有し、地域にとって貴重な存在である上に、同じ花園地域にあることから立地条件も大変よいことから、今後活動するうえでも連携を深めていきたいということで協力を得られたようだ。

本講座で各回、取り上げられているテーマは前掲の表1に示されているように、第2回目以降は主に花づくりと花壇管理の基礎的知識や技術に関わるものである。しかし、初回のテーマは「緑化ボランティア活動の進め方」についてであった。特に、講座開始に先立ち、室谷講師から「これは園芸講習会ではなく、ボランティアの講習である」との話があり、公共の場を利用するボランティアは、活動する中で常に自分たちが何をしているのか、考えながら取り組む必要があることなど、ボランティアの役割と活動について勉強することの大切さについての話があったことは特筆すべき点であろう。

初回の講義の中では、自分たちが住む街を、自分たちの手できれいにすること、ボランティアの活動にはいろいろな役割があり老若男女、体力のあるなしにかかわらず、誰もが自分のできる範囲の中で参加できること、などについて話しがあった。中でも「園芸ボランティアの活動を地域の中で活かす条件として、ボランティアがつくる花壇は、多くの人に見てもらえる場所

につくらなくては効果がない」ということは大変印象に残った。これは、多くの人に見てもらえる場所につくることにより、多くの人から評価を得ることができることから、活動に対するモチベーションがあがり、結果として街や地域の景観を向上させることにつながっていくということであり、ボランティア活動を成功させる上で、重要な鍵となる事項であると思われる。

大阪府立浜寺公園におけるボテンィア活動

本講座の現地視察に参加できなかったことから、後日、花壇の植えかえ作業日に日程（10月30日）をあわせて、室谷講師同行のもと大阪府堺市で行われているボランティア活動を視察した。場所は、大阪府堺市にある大阪府立浜寺公園であった。この公園内の花壇は、室谷氏が2003年に1年間18回に渡って講師を務めたボランティア講座の受講生が管理しているという。

現在は、ボランティアグループ名を「グリーンメイツ」と称し、26名が在籍し、毎週1,2回の割合で花壇の手入れ等の作業を行っている。活動を行っていたメンバーは、揃いの帽子とベストという姿で、胸には顔写真入りの名札をつけており、その表情からは公園の花壇は自分たちの手で美しく整備しているという誇りに満ちているように見受けられた。

「グリーンメイツ」が管理している花壇は、縦2m×横7mの横長サイズのもの3か所とそれよりも大きなもの1か所の計4か所で、これらは園路に沿って並んでいる。この日は、前もって中耕しておいた花壇に花苗を植えていくという作業であった。植えかえは、あらかじめメンバーが設計図を作成し、それに基づいて公園協会が必要な苗や球根を準備するという方法で行われていた。写真1-3に植え替え作業及び終了後の花壇の様子を示した。

花壇用の草花としては、ワスレナグサやビオラ、プリムラにチューリップの球根など、冬から春の花壇を飾る種類が組み合わされて選ばれていた。まず、現場で目を引いたのはそこで使われていた独自の道具類であった。花苗をまっすぐに植えつけるための目盛を書き入れた角材や、板、水糸を張る長い鉄ぐいなど、どれも作業をしながら工夫して生み出されたと思われる手作りの道具が用いられていた。

作業は、役割分担が明確にされており、設計図を見ながら指示をだす人、一

列に並んで植える人たち、ビニールポットから苗をはずして渡す人、片付ける人、と見事な分業であった。役割は固定ではなく、何度か交代しながら時には休憩をはさみながらテンポよく続けられていた。良く見ていると途中から参加する人も多くいたが、誰もが当たり前のようにスムーズに作業に加わっていく様子からは、メンバーの頭と体の中に作業の流れや大切なポイントが入っているのが見て取れた。それぞれの都合で、作業開始時間に集合できない人がいても何の問題もないようだった。

気がついた人が使い終わったトレーやビニールポットを重ねて片付けたり、作業中を意味する赤いコーンを移動させたりしながら作業を行っているため、植え替え作業中でありながらも常に片付いていた。途中で何度か公園内を歩く人が、作業に興味をそそられて話しかけてくる場面に出会った。そんなときは、作業の手を止めて手短に自分たちの活動について説明し、新メンバーの勧誘も行っていた。そうしながらも、縦横のラインがぴったりと揃ったプロの造園家顔負けの花壇が出来上がっていった。

考察

本講座に参加して、まず驚いたのは多くの人が受講料を支払ってまで花壇づくりのボランティアについて学びたいと思っているということであった。関西地方は、阪神淡路大震災という痛手を負ったことで日本全国の中でもボランティアについては経験が豊富でありボランティアをする、ボランティアをされるという双方の立場や気持について理解しているのであろうと想像することができる。だからこそなのかもしれないが気持ち良くボランティア活動を継続していくことの難しさについても、十分承知しているように思えた。

ここでは、セミナーにおいて、「園芸の知識と技術」、「ボランティア活動」の両方について学び、皆で共通の知識を得る。そのうえで、園芸ボランティアとして活動することが当たり前のこととして根づき、受け入れられているように思われた。そのひとつの模範例が今回見せていただいた、浜寺公園での花壇の植え替え作業であったと思われる。教育されたボランティアの作業とはこういうものであるかと感心させられた。ここに参加しているそれぞ

写真-1　せっかく耕した花壇の土を固めないように板に乗って作業する

写真-2　人数が揃えば植える人たちは横一列に並んで植えていく
水糸が張られており曲がっていないかチェックしながら次の段へ移る

写真-3　植え付け完了。手前はキンギョソウ'パレットローズアイ'、奥はノースポール
春になるとユリ咲きの赤いチューリップが顔を出す

れのメンバーは、この公園内で学んだことを地元に持ち帰り地域の花壇や学校花壇などでも力を発揮しているという。

ここでは、ボランティア＝無償の労働奉仕ではなく、「ボランティアは時間と労力を提供することで、園芸活動の知識や技術を得る」というギブアンドテイクが成り立っていた。それゆえに、1年間、18回の講習を受けたら終了ではなく、その後実際に活動することで見えてくる疑問点等について、更に学ぶことができるフォロー体制を整えることが必要であり、その体制があってこそはじめて自ら考え、活動できる実動可能な花壇ボランティアが育っていくのではないだろうかと思えた。

今回、東大阪市で開催された緑化ボランティア講座に参加したことで、筆者らが多摩市において園芸ボランティアを育成し、その活動を地域に定着させていくためには、まず次のような課題があることが明らかになった。

①園芸によるボランティア活動に必要な知識を共有するための学習システムの確立と普及

②誰もが気楽に参加できる組織づくり、活動を維持・継続していくためのノウハウの構築

③地域の行政や自治会、地元商店街などとの連携方法や話の進め方など地域活動を行っていく上で必要な情報の収集と提供

今後は、これらの課題解決に向けて、引き続き関西地域における先進事例の調査を行うとともに、多摩市及び周辺地域における園芸ボランティアの活動についても現状を把握するための実態調査を進めていきたい。

注

1　多摩市による公園施設等の里親制度（アダプト）は、行財政再構築プランにおける公共施設の維持管理方法の見直しの一環として、市民協働による管理運営手法の一手段として導入された。平成15年度に恵泉女学園大学が本制度の第1号となり、現在は20か所（平成19年末現在）で活動がおこなわれている。なお、世界初のアダプト制度は1985年に米国テキサス州運輸局が導入した「アダプト・ア・ハイウェイ」とされている。

2　多摩市落合商店街にある共有ひろばにある栽植マス（ツリーサークル）に野菜、ハーブなどを植え、食育菜園（食べられるガーデン）を広めるプロジェクト。詳細は橋本・岡井・澤登（2007）「ツリーサークルを利用したガーデンプロジェクトの実践」多摩ニュータウン研究№.9.p102-110を参照

3　兵庫県フラワーセンター、尼崎市都市緑化植物園をへて、2001年よりむろたに園芸研究所主宰。10年以上にわたり関わっている園芸ボランティア教育は、日本での第一人者と呼ばれている。

4　東大阪市が地域のまちづくりのための活動を支援するために交付している助成金。2007年度は18団体が選定されている。園芸活動を主としている団体の助成は「花づくりボランティアの会園芸なかま」を含め2団体のみ

5　知的障害のある生徒のための高等部だけの学校。福祉・園芸科、ものづくり科、流通サービス科の3つの職業科があり、3年間でで社会で働く力を身につけることを目標にしている。